

ビートルズの涙

幸田川森和

もくじ

第一章	台風前夜	6
第二章	目的のない旅	26
第三章	父の幻影	43
第四章	陰謀の匂い	64
第五章	『三林会』	90
第六章	恋の行方	117
第七章	パリに発つ	131
第八章	パリの恋人	151

第九章	憂愁のパリ	170
第十章	モデルの女たち	194
第十一章	遠い記憶	211
第十二章	新たな岐路	222
第十三章	母の悲劇	245
第十四章	女の矜持	264
第十五章	父の日記	288

愚行、あやまち、罪、吝嗇に、

心は充たされ、

その上お気に入りへの悔恨まで養う僕等、

乞食どもが大事に虱を育てるように。

僕等の罪科は執念深く、後悔の方は醒め易く、

懺悔はしても埋合わせはたつぷり受け取り、

一切の穢れも賤しい涙で洗い流せばそれまで、

鼻唄まじり、また泥道に舞い戻る。

ボードレール「悪の華」より

第一章 台風前夜

台風前夜のことはいつ思い出しても胸の高鳴りと息苦しさをともなつて、宗高むねたかの記憶をネガティブな混乱に陥れた。映画でダスティン・ホフマンが教会の高い窓から、新婦の名前を叫ぶシーンがある。あの悲しい世紀末的な声の響きとがどこかで宗高と繋がっているとしたら、それは無慈悲な台風のせいなのだ。

いま、その予兆ともいえる強い風、疾風のうなりを膨らませ、風の波を攪拌させながら、行き先もさだまらず、突き抜けたような素つ頓狂な音をあげて走り出そうとしている。やがてその触手の先のところに、煉瓦色の錆びれたような建物をとらえ、暗い密約をかわしたあとのように魔の手が忍び寄り黒い陰が一面を覆い尽くそうとしていた。頑丈なはずの鈍色のアルミの窓枠が小刻みに震えだし、不意にとばりが破れたように跳ね上げる蒸気の雨粒が窓の外枠全体を太鼓のよう荒々しくバチを打ち鳴らす。風と雨とのスリリングな葛藤と激流。威圧的な、小悪魔たちのあらごとにも似たこの振る舞いに、宗高はもうなす術を知らなかった。

「どうするんだ……おれは。どうするおまえなら、どうする？ 教えてくれ！」

弱々しくはき出す声は、吸い込まれるように語尾のほうから消えていく。

その言葉の欠片を追いつづける気力はなく、宗高はただずると床に崩れた。

そこにアルミの窓の最下部があった。縦に長い矩形の窓の一番下のところと宗高の目線とが同じ高さになり、勢いよく跳びはねる雨粒のシャワーが無数に見えていた。それはあたかも巨大な指先の振動の先端のところで、正体をさだめかねているガリバーの小人たちに似ていた。小人たちというより小人そのもの。萎縮した宗高の目線はもちろんそれ以上どこにも動きようもなく、うろたえ震えつづける自らの躰とともに、がんじがらめに膝を組み、停まらない震えをただ受け止めているにすぎない。

「ねえ、そのへんで止めたら……貧乏ゆすり」

突如、宗高の背後から抑制した声が届いた。女の声であった。

果たしてその主は榛名はるなであった。

「いつからそこに……いた」

宗高の怯えた問いかけには反応がなく、榛名はただ無邪気に笑っている。

宗高はひどく侮蔑されたように思ったが、それを無視して彼女に背を向け、再び小人たちの踊る様さまに釘付けのままだった。留まったような時間が屈折して、踊る小人たちが乱舞している。

もしここに神様がいるならば、次に用意されているドラマはどんな幕が開くのだろう。果たして宗高はそのシーンを正視できるだろうか。

かつて、夢想した裸婦の、猥褻なポーズを見るであろうか。放恣のままに妖しくうごめく裸婦は果たして、なにを用意していたのか、宗高にもわからなかった。

微かな音が、単調にしかもひとつの旋律をともなつて聴こえてくる。後ろを振り返れば、榛名の耳元が小型のヘッドフォンでふさがれていて、そこから漏れているらしかった。荒々しい風の音の間から、その旋律が透明な音を奏でていた。

「ドボルザーク？」

と、宗高は呟いた。

榛名は小首をかしげ、聞こえないというふうに両手を広げた。彼女は取り合う様子もなく、軽いステップを踏み、しなやかな肢体を揺らして、自分の世界に取れ込まれていた。宗高の入り込む余地はどこにもない。

宗高はその旋律に聞き覚えがあった。重低音の響きの中に混じる甲高い旋律が、喉の甲状腺に小骨が突き刺さったような異物感に似て、必ずしも好きになれなかったことを覚えていた。彼女がドボルザークに心酔しているという話は聞いていない。心地よい記憶でないその旋律に、宗高はあのとときホテルのラウンジで偶然、聴いた曲を、いやあのととき会った人物ココラム・シオンを思い出そうとした。

琥珀色に磨き抜かれたカウンターのその向こうに壁面いっぱいミラーが貼り込まれ、下のガラス仕切りには色とりどりの色とラベル、高さの違うボトルが並べられている。反射を抑えたミラーはどこから差し込むのか分からない光彩を集めて、妖しく青磁色の空間に満ちていた。そこ

に映る自分の姿を見るときもなく長い間眺めていた。すらりとした背丈と、精悍な顔つきを想像していた宗高はその疲れはてた、顔色のない容姿にいささか落胆した。もう何年もこの顔を晒して、自分であることを誇示してきたことに後ろめたいものを感じた。

待ち人はとつくに約束の時間を過ぎ、それすらなかったかのような静けさに戸惑いを感じて、腰を浮かせ、身を少しだけねじり椅子から向きを変えた。それがスイッチだったわけでもなからうが、あの曲が突如、彼の耳を奪ったのだ。必ずしも快適な旋律といいがたく、しかし、こころのどこかにずしりと響く、痛みを感じる序章だったことが、宗高をそのままそこに留め置いた。そこへ長身のココラム・シオンが赤い顔をしてラウンジに入ってきた。

「遅れてすまない」

と、ココラムは短く早口の英語で謝った。

「ドボルザークのお陰だよ」

ココラムは一瞬妙な顔をして笑った。宗高はラウンジに流れる音楽を説明し、それからカウンター椅子をすすめた。

ココラムと会うのはこれが初めてではないが、二人だけで外の席で待ち合わせたのはこの日が最初だった。かれはある商社の日本支社駐在員の一人だった。本社から派遣されてきたのは三名で、そのうちのアジア圏の統括はココラムが責任者だった。宗高とは取引の関係で知り合い、何度か家に招いたことがある。彼はアメリカ人らしいというのか、礼儀正しく快活に喋り、いつも笑顔絶やさなかった。そのとき、ココラムは妹の榛名と親しく口をきいていた。ホスト役はふ

たりしかいないから、社交術に長けた愛想だったか、それとも独身のココラムが若い榛名に興味以上のものを抱いたかは判然としなかった。そのあとの成り行きを見てみると、二人は宗高には内緒で交際を始めたようであるから、ココラムの心情は後者のほうだったと思うが、宗高は蚊帳の外、知らないふりを通した。二人の関係がそれからどのように進展したのかしなかったのか、宗高は詮索せず、無関心を装っていた。大人の二人に兄の無用な干渉は邪魔者であるし、榛名の、人を見る目を疑う気持ちもなかった。

いずれ落ち着くところに到るならば、その兆候はあるはずだった。

が、その時期は宗高が予想していたときよりも早かった。

「ぼくは一週間後、いったん帰国と決まった。じきに戻る予定だけれど、その前にお願いがあつて……」

とココラムは淀みのない英語をたたみかける。これがビジネストークに長けたエリートの才覚だ。

宗高は、少し前にココラムから自分の国に来ないかと誘われている、という話を榛名から耳に入れていた。だから、前置きは無視した。

「榛名からは一部始終を聞いている。ぼくの意見を聞くより、まず当人の榛名はなんとやっているの」

「ハルナは、お兄さんの許しを得ないと行けない。だから、一度、兄に言ってほしい、と」

ココラムは宗高の顔を覗きこむようにして栗毛色の髪の毛の髪を強く匂わせて顔を近づけてき

た。相手に躊躇の余地を与えず、一気に切り込む体勢がいまのココラムなら、宗高は受けて立つ立場に置かれている。ココラムの外人特有の男の匂いを一瞬感じさせ、宗高は顔を顰めた。やはり日本人の体臭と違うものをかれは持っている。狙った獲物は万に一つ、外さないやさしい目の奥に潜む、獷猛な、生殖動物の雄を感じさせる。

目と目が合う。ほんの一瞬の見えない火花が散っただろうか。男は見つけた獲物に執念を燃やすとき、何故か異常なほど滑稽な、いや常軌を逸した行動に走ってしまう。相手が榛名のような東洋の女となれば、なおさら拍車がかかるだろう。ともかくココラムの青い目はそんな予感を秘めていた。

宗高は目の前のグラスを手に取り、少し口の中に含んだ。

「どうしてもぼくの意見を聞きたいらしいな。ぼくは古いものの考えかたをするタイプだから、本当はもう少し付き合ってから、つまりお互いを理解しあってからでも遅くないと思っている。しかし、きみたちはもういい大人だし、ぼくの考えにしたがう必要はないよ」

間近のココラムは顔色ひとつ変えず、宗高を見つづけていた。そして、目線はさまざまの形のボトルが並ぶ壁のほうを彷徨った。ボトルは高いところから階段状に整然と並んでいた。青いライトが奥のほうをほの明るく照らしている。

しかしココラムの青い目がその棚のクリスタルグラスに向かって、何故かきらりと光った瞬間を宗高は見逃がしていた。それがどんな意味を隠していたのか、宗高はまだ知らない。

「急いで帰国するには理由があるんだ。父が重い病気で臥せていて、もう治る見込みがないら

しい。できるなら、生きている間にハルナに会ってほしい。父を安心させられる」

「そう、それは知らなかった」

ココラムは仕事以外のプライベートなことを余り口にしたことはなく、したがって、彼の境遇について知り得ることはわずかだった。

「父は、ぼくが十四歳のときから男手一人で育ててきた。母とは離婚し、それからずっと兄弟仲良く暮らしている。父は再婚はしなかった。父にとって、たぶんぼくたち兄弟がすべての筈だ。だが、その父ももう長くはない」

その顔には、諦めと無念さが滲み出ていた。とてもそれがココラムの演技とは思えない。

「うちはとつくに両親は死んだ——」

宗高はあえてそのことを口にした。

「ああ、知っている……」

宗高は、ふとこの話はココラムよりも榛名のほうが真剣になっているのではないかと思った。彼女はいつの間にか婚期を逸した年頃になっていた。その責任の一端は、いや大半は宗高の側にあった。二年も続かなかつた宗高と三津子みつことの結婚生活は、呆気なく終わったと言うべきだろう。その後、宗高はいつまでも独身を通し、その間、榛名を手離さなかった。彼女が望んだのか、宗高がそう仕向けたのかは問題ではない。その榛名をもう自由に解放してあげてもいいのではないのか。宗高はそう思った。

「一緒に行けよ。ぼくはきつと喜ぶと思うよ。そして何よりきみのお父さんが……」

初めてココラムは目元に笑みを浮かべた。

「これから榛名と会うつもりじゃないのか。先に行けよ」

高い椅子からひよいと降りた長身のココラムの身は軽そうだった。

「彼女を幸せにする、と約束する。滅多に言わないんだが」

「そう簡単に言われたら困る」

と言つて、宗高はココラムの肩を叩いた。ココラムは足早に出て行った。

「今度はモーツアルトか……」

と、宗高は呟き、グラスの中身を飲み干した。

荒れ狂う風は呼吸するかのようにうなり声を立てて、空中高く舞い上がっていく。窓の向こうには、ぼんやり浮かんだ明かりが辛うじて外の景色を保っていた。ここから、夜空を眺め、不意に世界はこの景色のなかから一歩たりと飛び出すことはないと思ったり、点在する明かりの存在が自らの不安と焦躁を和らげてくれた……。

遠い記憶——。それは言葉にはならない。いや言葉にしてはいけないと宗高は自らに封印した記憶を自制していた。

榛名は座っている宗高のもとに並び、そつとその胸に凭れた。ほのかな香水の香りが鼻先を掠めていく。その光景だけを捕らえるなら、恋人同士である。

「こうしていると、妙に落ち着くの」と甘える榛名。

「そうだな、ほくも救われている気分だ」

「いつまでもこうしてて、風邪ひいても知らないから」

咎めるといふよりも甘えた調子であった。

宗高はずっと夜空を見て育ってきた。机の前の窓のカーテンを開けっぱなしにして、本を読み、ペンをとった。だから部屋にいと、窓という窓には夜空の明かりがこぼれていた。

「覚えている、お母さんが血相変えて怒った日のこと」

榛名の台詞に不意に宗高は懐かしさが込み上げてきた。

「ああ、近所の人々が亡くなったときだ。あのときは礼儀として、窓は締めなさいと言っていた。でもぼくはそれで納得したわけでない。人が死んだとき、何故窓は締めないといけないのか」

「覗いているみたいに取りられるからでしょ」

「他人の悲しみを覗きたい。誰が簡単に自分の悲しみをみせる？ みんな隠しているんじゃないのか」

母の声が目元にまだはつきりと残っていた。

「儀式よ、ギ・シ・キ。形式がここでは優先するの」

母は宗高を怒ることは滅多になかった。というより、宗高自身が怒られるような真似をしなかったからだ。そのときの一度だけの体験は宗高に鮮明な記憶となって残った。

「どうしていまごろそんなことを言うんだ」

荒々しい動きを見せる窓枠から目線を離さず、宗高は凭れる榛名の重さを肩のあたりに感じて

いた。

「思い出したの、母を……」

「榛名はお母さんが嫌いだったのじゃなかったのか」

榛名の顔は、若いときの母の顔によく似ていた。というより、年齢とともに母そっくりに近づいてきたと言うべきだろう。けれども、宗高はそれを口にしなかった。

「お母さんの激しい感情にわたしは怯えていたと思う。母の金切り声がわたしのこころを萎縮させていたわ。幼いわたしだったけど、それだけはわかった」

「お母さんはあまりにもできすぎた妻だから、お父さんは息苦しかったのだろうな。早く有名になってほしいと言われ、父は後ろからいつも鞭打たれているような危機意識があったのかもしれない。それを口にするお母さんがいつか煙たい存在になっていくことだつてある」

「そうね、家庭のなかの男と女の演じる役目の違いというの。いまのわたしなら、少しは理解できるけど……」

彼女は、確かめた事実をなぞるように言った。

「お父さんもわがままだったんだ。母のように良き父であろうとしなかった」

宗高はそれとは分かっていながら、父の所業を許してはいなかった。いや、突き放していたのは宗高ばかりではなく、榛名のこころも父母からは離れていたのだろう。二人の子供を愛する気持ちは二人に残されていたなら、こんなにも早く死別することはなかったのかもしれない。

「わたしはお母さんの世間に対する焼き餅が嫌いだった」

「母の焼き餅って……」

「母の世間への上げへつらい。それが父への仕打ちにもなったと思う」

「そんなふうに見ていたのか、榛名は」

ため息ともつかない宗高の口振りだった。

「昔の榛名は、お母さん子だったし、ぼくは世間の観察からすると父親っ子になっていた。いずれも当たっているとは思えないが、世間の目はそれで良かったのだろう」

榛名はふと、指先を突き立てて、宗高の顔をさわった。

「なんだよ」

「その調子、お父さんにそっくりよ」

「止めよう、こんな話」

と、不意について宗高は立ち上がった。

自分たちが二人の親について語ることの虚しさはずっと昔に、いやというほど味わったことではないか。いまさら、父や母が、子供たちに語るものは何もない。

「ねえ、ねえ、わたしたちはいつまでも一緒に暮らしていけるよね」

榛名の丸まった瞳の向こうにある、何か頼りない光を宗高は見ている。

榛名にとって、ココラムはその光の中心にある存在になるのではないのか、と思う。それともその光にまだ一抹の不安を宿しているというのだろうか。

宗高の元から榛名が去る、という事実は認めがたいことではあるが、宗高一人ではどうするこ

ともできない現実であると思っていた。

「もう、おれに遠慮することはいらぬ。榛名の好きなようにしたらいいんだ」
すぐに反応があるかと思つたら、彼女の口はすぐには開かなかつた。

「お酒と素敵な音楽、そして静寂な夜……」
と榛名は呟いた。

「なんだ、それ——」

という問いには答えず、榛名は話題を変えた。

「お兄さんはどうして別れたの、三津子さんと」

「藪から棒に、なにを言い出すんだ」

「お酒と音楽、そして喧噪の夜。まさかこちらのほうを選んだというんじゃないでしょうね」

榛名は宗高から離れ、向かい合つた。真正面には成熟した榛名の躰があつた。黒いレース生地のようなガウンをまとい、胸のふくらみがはつきり浮かび上がっている。

「ぼくは三津子を幸せにする自信がなかつた。不幸せにすると分かつたから諦めた。自分にふさわしい生き方というのを考えると、いまのままが一番いいという結論になつたんだ」

「でも、もうすぐわたしは結婚するのよ」

榛名の声が幽かに濡れていた。

榛名のところはもう決まつてしまつたのか。

宗高は立ち上がつて、洋酒のボトルをサイドボードから取り出した。グラスにストレートで注

ぐと、少し口に含んでみた。熱い液体が口のなかで広がり、そのまま胃のほうに押し寄せてくる。

「そのことは歓迎するとココラムにも言った筈だ」

「本心でそんなことを。私がいなくてもいいのね」

宗高はまたグラスを傾けた。

「いつだって、ぼくは一人で生きていると思っっているよ。これから先もずっとだ」

勢いに任せて、宗高は強気に言った。

「ココラムは、お兄さんはいいい男だ。仕事はできるし、信用できる、と。でも、彼は一人では生きていけない男だとも言っていたわ。よく見抜いていると思っただ、わたし……」

宗高は榛名の顔を見ていた。黒いガウンの上にある白っぽい顔が、ますます母の顔に似てきたと思っただ。

「おまえが言いたいことは分かっている。しかし、ぼくはまだ再婚はしない。理由を聞かれる前に言うと、自分の一生を賭ける女がまだ現れていないということだ。そのうちいい人と巡り会えることをぼくはもちろん信じているがね」

腰を浮かせて立ち上がった榛名は、そばのアンプのスイッチを入れると、一枚のディスクを入れた。ピアノの柔らかい旋律が小気味よく聞こえてくる。そして彼女は宗高の後ろにある窓ガラスの厚いカーテンをそっと引いた。

「お願いがあるんだけど、聞いてくれる」

と榛名は柔らかに言った。

宗高は肯く代わりにソファアに座り直した。

「わたしを描いてほしいの、裸のわたしを。できることなら油絵で」

「なにを突然言い出す。いま思いついたのか、それとも……」

「うまく言えないけれど、わたしをこの部屋に残しておきたいから。わたしたちは親なしでずっと離れずに育ってきたし、これからもずっとそばにいたいと思っっているの。お母さんは……」

「分かってる、いいんだ」

と、宗高はその先を制した。

父のもとを逃げるように離れて行った母、父もまた隠れるようにパリに発った。遠い昔のことだ。

若い頃から裸婦を描いていた父。その父が生涯敬愛しつづけたモディリアーニ。裸婦というモチーフを通じて父がモディリアーニに求めていたもの……。美の極地といい、エロスの源とされた裸婦、そしてそのモデルたちとの交情。

ふと、宗高はモディリアーニの裸婦の絵を思い浮かべていた。モデルになった裸婦たちは、キヤンバスの前では画家の意のままに動く人形となり、美の表現のために、自らの意思を捨て、羞恥も外聞も捨て去るだけの奔放さ、大胆さを持ち、それでもなお自分でいられるという仕掛けを自然に身につけているとしたら、それは女としてのふてぶてしさであり、肉体が商売になるという安易さも同居していたことだろう。しかし、そのモデルが自分の愛する妻や恋人だったら……。あのジャンヌ・エビユテルスの振るまいは、モディリアーニへの愛だけがこころの支えになって、

かれの情熱を受け止めつづけたのだろうか。ジャンヌはかれを深く愛すれば愛するほど、モデルになる自分を許していたということだろうか。

しかし、ジャンヌはそのとき健気にこう言ったのだ。

「かれが絵描きであるというのを誰が認めるといふの。このわたししかないのよ」と。

その悲鳴のようなことが、モディリアーニを突き動かした。絵描きを狂ったように演じる自分をそこに見ていたというのか。

榛名もまた、ジャンヌのように宗高を絵描きとして認めていればこそ、その大胆ともいえる発言を放った。榛名だけではない。母もそうであったろう。いまの榛名の気持ちを推し量れば、そのようになる。だが、それにおれは応えられるだろうか。いや、父はそうやって母の期待に応えようとしたのだろうか。

その問いかけに答えは用意されていない。答えを導き出すのは他ならぬ自分一人であるから。が、もしそのようなことが許されるならば、そしてそれが榛名のためならば、その見えない答えを導き出してもいいと思った。

そうだ、いまは榛名のために、いや、榛名の前では絵描き宗高でありつづけよう。榛名の願いは他ならぬ宗高の願いでもあるのだから。

そう自分に言い聞かせると、不思議とこころのわだかまりは消え去り、つかえていた昔の思いがその内側から湧いてくるのを感じた。榛名のために、絵を残そう。ただ、それだけのためでもないではないか。

「ソファアに横たわる女、それでいいでしょ」

その声を宗高は天から届くジャンヌの声のように聞いた。

言い放つ榛名は、いきなり黒いガウンを脱ぎ捨て、背中を見せながら、黒のブラジャーとショーツも取った。アンブの横にそっと置かれたそれは、鈍い光を放って、宗高には眩しかった。「心配しないで。ココラムだって知らないことだから」

そう言つて、本当にソファアに横たわった。

白い豊満ともいえる肉体が放つ怪しい光が不意に部屋を眩しくし、異様な密度をかもしだしていた。

榛名はこめかみに青筋を立て、キリリとした鋭い視線の、凄みのような勢いに押され、宗高は少し離れた別の椅子に移り、そこに腰を落とすと、グラスの残りを一気に呑み干した。そこにいる一人の男宗高はほとんど殺気だっていた。両手で自分の頬をバシバシと叩いた。そして、背に垂れたまま、じつと動かない榛名の裸を見ていた。その裸婦のポーズはジャンヌのように気高く、魅惑に満ちている。そしてふてぶてしい精神が自分のなかにまだ宿っていることを不思議に思いつながら。

肩の線まで垂れ下がった髪の毛が彼女の肩肘の鎖骨のあたりに黒い固まりとなっていた。榛名はその流れる髪の毛を片手で背中に押しやった。二つのふくらみがわずかに揺れ動いている。ふくらみは彼女のひそやかな呼吸をしつかりと受け止め、かすかな静脈の青い筋を浮き立たせている。懐妊した妊婦は、その血流の激しさを青と赤に鮮烈に分け隔てするのだという。やわらかく

くびれた腰の回りは胎盤の大きさに比例し、ふくよかに曲線を描き、太い肢体が自然な形に伸びきり、下肢へとつながる筈が、もう一方の下肢が不自然に折り曲げられ、下腹部は宗高のほうに向けられていた。モデイリアーニの裸婦にない構図を榛名は意識していて、こんな卑猥な肢体を考えたのか、その真意が読み取れない。彼女の秘密の部分は濃い絨毛のような茂みの下に隠れて、果肉のような艶やかな光をほんの少し湛え、色づき、濡れて、しかしまだ始まらない性の営みにじれたかのように震えている。

宗高は、思いがけずあの裸婦像が頭を掠めた。父のそれではなく、モデイリアーニの油彩の染み込んだ深い肌色に染まった裸婦。まどろむような、日射しのなかにある色彩とは違う光彩にまつまれた裸婦の姿が脳裏の片隅に点滅している。そして目の前にある裸婦の、艶かしい姿態。女体が放つ官能の美は、いまきつと彼女の中心から音もなく、彼の脳裏のどこかを刺激して魔性の力を与えようとしていた。

「相変わらず、榛名は強引だな」

「破廉恥といたいの」

「いや、そうじゃない。以前から知っているモデルのような気がした」

「素質ありということ。だとしたら嬉しい。わたし、専属モデルになってもいいわ。宗高画伯だけだよ」

おどけたような声だが、その顔は笑っていなかった。

「でも、榛名はモデルじゃない。モデルではなく、美しい人だ」

「ピカソの女にしないで」

「うぬ、注文が多い。それ以上いうと、誰かに似てくるよ」

誰かと言わなくとも浮かぶのは母の姿。いや母の裸婦だった。

あの日が、宗高の青春を壊し、気が触れて強制的に病院に送り込まれた。

「裸婦は危険だな。ぼくにとつての、忌々しい記憶に繋がるよ」

「入院のことね。そんな昔のこと話さなくても……いいのに」

榛名は顔を顰めた。

宗高は、ディスクの甘い旋律に耳を傾けていた。ピアノのシャープな響きには大きな波のうねりを思わせる、揺るぎない波動となつて、世界を大きく広げようとしている。旋律はいま満ち潮を迎えようとしていた。

あの日はどんな日だったのだろう。父と母にとつての特別の日ではなかったかもしれないが、宗高にとっては、特別な日だった。そしてそれは子供が見てはならない光景でもあった。思えば二十年以上も前に、宗高はいまと同じ光景に出食わした。ただの偶然、いやただの運命のいたずらに過ぎない光景だった。父が母を裸にして、キャンパスに立たせていた、あのときのアトリエ……。

宗高少年が、父の仕事場に踏み込んだのは今度開かれる運動会に父にも来て欲しいと頼むつもりだった。その仕事場にいたのはモデルになった母、裸婦の母だった。母は素早く衣服で隠そうとし、宗高の視線を逃れようとしていた。

そのとき父は苦し紛れに思い付いたことを言った。「モデルが休んだんだ」と気まずそうに言い訳をした。モデルが裸でキャンバスの前に立っている光景はたびたび目にもし、別に驚きもしない宗高であったが、そのときの衝撃はことばにできなかった。父の犯した犯罪を目撃してしまつた、そんな気持ちだつた。幼いときから父のような絵描きになりたいという淡い思いすらもその一遍の事件で吹き飛んでしまつた。

宗高は、いつかスケッチブックとコンテを手にし、モデルになつた榛名を見ていた。自分の指先が膝の上でわずかに震えた。母をモデルにしていた父には、自分の妻という意識があつたのだろうか。あるとすれば、手にした筆にも狂いがあつたかもしれない。あときは、モデルの休みを口実にしていたが、そうではなく最初から母を、自分の妻を描こうとしていたのではなかつたか。所詮、あのとときの理由も事情も少年にとってはどうでもいいことだ。しかし、あるとき描かれた筈の絵は父の手によつて処分されたのか、どこにもなかつた。完成したのかどうかさえ宗高は知らない。

「お兄さんは、絵をもう諦めてしまつたの」

榛名の問いかけに、宗高は我にかへつた。

すっかり母の姿を再現するほどの年齢を迎えた榛名の声。

母はひよつとしたら、父にそんな問いを投げたのではないだろうか。煮えきらない父を励ますつもりで、母は自分からモデルを買つてでたのでは。ちよつどいまの榛名のように。

「さあね、自分ではよく分からない。しかし、いまは少し描く気になつている。ちよつと興奮し

ているがね。おまえの裸は眩しいよ」

「その調子。宗高先生。ただし、へんな気は起こさないで」

スケッチブックに榛名の躰の輪郭がぼんやり浮かんでくると、宗高は父の筆致を思い出していた。太い線と柔らかな輪郭の調和にルノワールやゴーギャンのそれを思わせたのに、何故父はモデリアーニにこだわりつづけたのだろうか。父はいつもモデリアーニの絵を模写し続けていた。何枚も何枚も、終わりがなかった。だが、父はあの事件を契機にキャンバスの前に立つことは二度となかった。何故、父はそうしたのである。

その推理にも似た考えを思い出しながら、晩年不幸だった父を、宗高はいとおしく思った。

宗高は自らの指先が自分の意識に反してゆっくり動き始めるのを奇妙な生物を見るかのように眺め、少し酔っているなと感じた。それでもスケッチブックの感触を確かめるように、黒い線画のあとをゆっくり手のひらの甲でなぞっていた。

そしてその触覚が榛名の下腹部をとらえたとき、不意に自らの躰の異変を感じてしまった。それは自らの性器の勃起を意味していた。いったいこの感触は何なのだろうか。過去に裸婦をモデルにキャンバスに立ったことはいくらでもあるのに、この感触に襲われることは一度たりともなかった。それは決して禁忌として自らを自制していたからではなく、被写体への集中が雑念を払っていただけに過ぎない。だとするなら、おれは榛名への雑念を振り払えず、単に好色な男になったというだけであろうか。

見つめる先には笑みさえ浮かべる榛名が横たわっていた。惜し気もなく、自らの秘部をさらし

て不動の姿勢を保ちつづける神経を宗高は理解できなかった。男はつねにその秘部の存在を意識して、女たちの存在を気づかっているのだ。淑やかな女性を前にして、想像をむやみに掻き立てる男の暴力ほど、悪質でわがままなことはない。しかし、女はそれを知ってか、やはり男たちに向かつてさり気なく性的幻惑を放っている。まるで世の中は、男と女という性の構図によってのみ彩られ、その誘惑には誰も勝てないと見透かしているかのように。

「ねえ、ちゃんと描いているの。わたしを女と思ったら、ダメよ」

と、榛名の甲高い声が静まりかけた部屋に響いた。

嵐のような雨足は榛名の狂気のような声におののいて静かに後ずさりし、立ち去ったかのように、この濃密な空間から離れ始めた。確かにそれは狂気の沙汰に違いない。男が、女が自らの理性や信念をかなぐり捨てて、性の営みのために惑い狂う一瞬をかもしたすのであるから。しかし、画家はいったいその狂気の内容をどのようにキャンバスに投射し、危うい均衡を保つことができるのだろうか。

ふと、見ていると榛名は不思議な光景を醸し出していた。それは、榛名の演技というよりは、その狂気そのもののように映っている。榛名は自らの性器に指先をからめ、そしてその存在を確かめるかのようにいくつもの細い指先がその肉厚の襞をゆっくりなぞり始めたのだ。

「……だって、女はいつも知らないところでここが勝手に疼いてくるのよ、わかる」

誰に聞かせるふうでもなく、榛名は自らの行為に没頭している自分を、冷静に観察していた。彼女の性器の中心はゆっくりと濡れていった。

しかし、榛名の肉体は最初の姿勢のまま微動だにせず、秘密の場所は別の生命の複合物のようでもあった。

「……加減はなしよ。だって、その手加減が好奇心な目線を刺激して、あらぬ想像をばらまくからよ。わたしが望んでするのは裸体の神秘なんていうペールを剥ぎ取って、醜いほどに赤裸々に描くこと。そうすることで男の他愛ない妄想をぶち壊すことよ」

その突き抜けたような声はとても榛名とは思えなかった。

確かに、その通りかもしれない。裸婦を題材にするもののすべては何かの想像を喚起する一つの媒体に過ぎず、その期待通りの体裁が画商たちを熱気づけ、値踏みされて、金縁の額という加工を加えられて最高の商品に仕立てあげられていく。その額物が金か、銀か、はたまたただの木製か、それがどれだけの値打ちに上下するのか、画家にはあずかり知らないことだ。画商は最初に胸算用があつて、正鵠を得た勝算をほとんど本能的に察知するのだ。

だが、榛名の檄はいまの宗高には逆効果、ものいう性器の咆哮に自らの自制を失い、制御どころではなく、暴走するのを止められないほど凶暴になった。裸の女の前で凶暴になる男はいるかもしれないが、画家はしたたかにその凶暴さを隠蔽し、芸術という神の声に耳を澄ませて、ときが満ちるまで暴発してはならないのだ。宗高は、自分の下腹部にもうひとつの心臓を感じ、そこに脈打つ振動を片手で押さえつけていた。それが精一杯の防御だ。

「ねえ、こっちに来て。わたしのまだきれいでしょ」

いったい、榛名の中に生まれている小悪魔はどんな道具立てを用意しているというのだろうか。

宗高は固い椅子に釘付けになっっている自分を意識し、それを見透かして言い放つ榛名を憎いとさえと思った。おれは、勃起している。いったいどういう精神がそんな台詞を言うことができるのか。

「ああ、その通りだ、認めるよ。しかし、みだらに見せるものじゃないよ、そこは」

「当たり前よ。わたしにだって、矜持と節度は知っている」

それなのに、何故、それほどに大胆に恥じらいも恐怖もなく、平然としていられるのかわからない。

やがて、榛名は自ら望んでいたのか、ゆっくりと性の疼きの中に没頭し、宗高の目線を無視して、のめりこむ様をたどっていった。恍惚という女の、闇のような世界が開かれようとする。女性の性器はそのようにして、刻一刻と変化し、蠢く生物の様相を呈していた。それはココラムとの性交を思い描いていたものか、宗高は知るよしもなかった。

第二章 目的のない旅

その日もまたしとしと降り続く雨であった。朝早く、空港に発った榛名はココラムと一緒に彼の故郷であるコロラド・デンバーに向かった。

榛名は二週間ほど留守にすると言い残し、その間、絵の進行を楽しみにしているとも言った。しかし、宗高にとって、手に染めた裸婦のスケッチは公にすることはなく、いわば榛名との秘密のような行為である。二人だけが知りうる秘密が宗高の気持ちをつなぎ止めている。いや、それは逆で榛名の気持ちをつなぎ止めていた。そう宗高は信じようとしていた。

そして宗高もまた不意に思いついて旅立った。

昼過ぎには東北方面に向かう列車の人になっていた。どこに行くという目的もなく、ただ駅に着いてから決めたのだった。

季節外れの列車は思った以上に空いていた。宗高の車両には間をおいて、数人しか乗っていない

かった。駅を出てしばらくすると、一番近くにいた中年の男は、席においた大きな鞆を枕に眠り始めた。宗高からもっとも離れていたところに三十ぐらいの女が陣取り、売店で買ったらしい駅弁を広げ、うまそうに箸を運んでいた。ほかにサラリーマンふうの男が二人離れて座っているだけである。車掌が席を確かめるかのように検札すると、あとは誰も車両には寄り付かなかった。

車窓の景色は山あいのなだらかな高原がつづき、家並みはほとんどなかった。途中から雨のほうは止み、その流れる景色は鮮明に映えた。けれども、宗高はこの景色といい、この単調な静けさといい、馴染めずに気持ちが悪くなるのがなかった。望んだはずの目的のない旅も、思うほどの安住の場所にあらず、自らを解放できない。コロラドに向かった榛名はまだ機中の人であった。ココラムと榛名の顔が交互に錯綜し、宗高は無意味な笑みを浮かべた。

そして、宗高は当然のようにあの夜の榛名の裸体を思い出していた。父が母の裸体を描こうとしたように、宗高は妹のそれをモデルにした。絵の勉強を捨てるきっかけとなった母の裸体が、いま宗高に再び筆をとらせようとしている。母は何と言うであろう。もしも、まだ生きているのなら……。

父と母が離婚したのはもう遠い昔のことだ。父はパリに渡り、その地で客死した。交通事故だったという。でも、父のそれは自殺だった疑いもある。傷心の父がパリの憂愁に消えようとしたのかも知れない。それからしばらくして母の死を知人が知らせてくれた。やはり事故死であった。宗高は父と母の死をどちらも見届けたわけではない。パリには行かなかったし、母もどこで亡くなったのか分からなかった。だから、母はまだひよっとして生きているのかも知れない。